



むびょうニュース

病気のもととなっているのは食生活の乱れからくる腸の汚れです。食生活を改善し、腸を日々きれいにしておきましょう

抗がん剤でさらに病気が増える

がんは現代の日本人を苦しめる代表的な難病です。西洋医療では、がん治療に三大療法が用いられます。手術・放射線療法・抗がん剤治療で、日本は世界で一番抗がん剤が治療に使われている国なのです。抗がん剤にはがん細胞のDNAを切断させる力があります。要は、活性酸素という「毒の力」を利用して、がん細胞をころすということです。しかし、「毒」を使うわけですから、当然ながら大きな代償があります。

①その「毒」は、がん細胞のみならず正常細胞を痛めつけ、違う病気を引き起こしたり、新たながんを作ったりする。

②栄養分を吸収する小腸の微絨毛を破壊し、全身の免疫の70%を担う小腸をも破壊する。

抗がん剤の使用は、このような大変なリスクを背負っていながら、どんなに多く見ても体に果食っているがん細胞の半分も殺せません。おまけにその攻撃に耐え、生き残ったがん細胞たちは以前より強くなって大繁殖するのです。1988年にアメリカ国立がん研究所(NCI)が「がんの病因学」を発表しましたが、その中に見逃せないことが記されています。「15万人の抗がん剤治療を受けている患者たちを調べたら、肺がん、乳がん、卵巣がんの人に膀胱がんが増えた。白血病で抗がん剤治療をすると、新たながんが増えた。卵巣がんを治療すると大腸がんが増えた」とあるのです。なんと、抗がん剤はがんを何倍にも増やす「増ガン剤」だ、と断定しているのです。その理由を「抗がん剤に対する耐性の因子(ADG)ができてしまうことによる」と話しています。この発表は衝撃的で、世界中を駆け巡りましたが、不思議なことになぜか日本では報道されませんでした。ある実験結果でも、恐ろしい報告がされています。抗がん剤投与が多くなればなるほど、がんは小さくなるが、また死ぬのも早くなるという驚くべき報告です。

①抗がん剤の副作用が強くて、肉体が耐えられなかった。 ②肺のがんは縮小したように見えたが、実際は逃げ出し、生き延びたがんはかえって強くなり、後で急速に繁殖した。

この場合の副作用、余病で多いのは、腎不全や肺炎、多臓器不全、新たながん、再生不良性貧血などです。腸の機能を破壊する抗がん剤は、病気は「腸から治す」という私の治療法に反するからです。私のがん医療の特徴は、体の免疫力を高めることです。食物の改善、腸管免疫の活性化、ライフスタイルの改善、意識の改善、細胞の抗酸化などでがんと闘っているのです。抗がん剤だけでなく、西洋薬のリスクについても言及しておきます。「病名→診断→即投薬」これは、現在の診断ではほとんど常識です。「高血圧ですね。降圧剤でコントロールしましょう」「コレステロール値が高いですね。薬は勝手にやめると危ないですので、やめないで続けてください」「胃潰瘍です。抗潰瘍剤を出しましょう」「風邪です。抗生剤を飲んでください」この薬漬けによる治療は、実は恐ろしいことなのです。人間が本来持っている、治ろうとする自然治癒力や免疫力を奪ってしまうことになるからです。人体にとって「異物」なのです。異物とは、「生まれたときに体に存在しなかったもの」です。例えば、胃潰瘍の薬を服用し続けると、何年か後のがんになったり糖尿病になったりします。抗生物質を服用し続けると、カビ(真菌)が生えたり、免疫力が弱くなったり、さらにはがんが生じることもあります。抗生物質は腸内細菌の善玉菌を死滅させ、腸内は腐敗だらけになってしまいます。腸の腐敗は、あらゆる病気を引き起こす原因です。副腎皮質ホルモン剤(ステロイド剤)を服用し続けると、感染症にかかりやすくなったり、白内障になったり、骨粗しょう症になったり、挙句の果ては突然死まであります。このように薬を飲み続けると、今ある問題とは別の、新たな問題が起こりやすくなるのです。

平素のご厚情を深謝し
益々のご発展をお祈りいたします
本年も変わらぬお引き立ての程
よろしくお願い申し上げます
平成二十六年 元旦